

これで大学入試は全廃できる

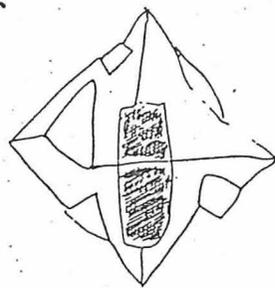
はしづめだいさぶろう
橋爪大三郎

リッチな家庭の一人っ子だろうと、貧乏所帯の末っ子だろうと、同じ条件でつまり、本人の希望や適性だけにもとづいて、大学に進むかどうか決定できるためには、本人がその費用を負担するという原則が一番手取り早い

世の中にそうそううまい話は転がっていない。だが、たまにはあるかもしれない。たとえば、つぎの問題が一举に解決、と聞いたらどうだろう。

- ①だらけきつた大学に活気が戻り、大学生が本気で勉強を始める。
- ②入学試験が事実上なくなって、受験地獄が解消する。
- ③日本中の親を悩ませている、教育費の圧迫が取り除かれる。
- ④ついでに財政支出も、毎年かなり(二千億程度)削減できる。

こう並べると嘘みたいだが、そんな妙案がありそう。ひとまず私のプランに耳を傾けてほしい。



ポイントとは、大学の学費を親でなく、学生本人が支払うようにすること。そのかわり、月謝さえ払えば誰でも入学を認める。学生は手持ちの現金などないだろうから、大学が長期のローンを設定する。返済を集団で保証するため、団体保険を組もう。月謝をコスト相応、つまりいまの数倍に引き上げるかわり、奨学金の枠も思い切って拡充する。これはという学生には、月謝を払っておつりが来るぐらいに支給したい。大学の財政も安定するから、私学助成金などに頼らないう、自由な運営が可能になる。大学は活力をとり戻す一方、受験競争も姿を消すだろう。——というのが、大体の青写真だ。そうとんとん拍子に、話が運ぶものだろうか? と思って、あれこれ考えたが、うまくいかない理由が見当たらない。

1989-30

1/7

奨学金返還免除の矛盾

具体的な話に移るまえに、どうしてこういうことを考えたのか、まずお話ししたほうがよさそう。

そもそもは、日本育英会の奨学金制度を、つくづく不合理だなあと実感したのがきっかけである。よくご存じない方のため、恐縮だが、私の例で説明しよう。

私は東大の大学院(社会学研究科)に、昭和四十七年四月(五十二年三月の五年間在籍した。修士課程の二年間は月額二万七千円、博士課程の三年間は月額三万円、日本育英会の奨学金を受けた。貸与の総額は二百二十八万円。これを現在、無利子の年賦で返済している。これまでに毎年四万八千円+七万三千円+十二万一千円ずつ返済して、残額は八十一万八千円。来年には修士の分を返し終り、それからは毎年七万三千円ずつ返済、平成十年度に負債がゼロになる予定である。

これで大学入試は全廃できる

橋爪大三郎氏



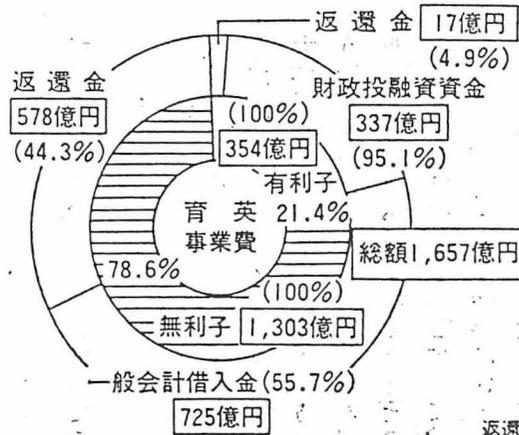
1948年神奈川県生まれ。東京工業大学助教授。東京大学大学院社会学研究科博士課程を修了ののち、無所属で研究を続ける。今春、公募をパスして、現職。言語・性・権力を柱とする「記号空間論」を構想中。著書に、『言語ゲームと社会理論』(勁草書房)、『冒険としての社会学』(毎日新聞社)、『はじめの構造主義』(講談社現代新書)などがある。

大学院は、研究者の卵の時代。演習の準備だ何だとかかなり忙しい。だから育英会の奨学金はとて有り難かった。現在(平成元年度)の貸与月額、修士八万三千円、博士九万円にアップしている。私が受けていた頃の、ざっと三倍(とうとうとは、返す額も三倍)。すべてをまかなうには足りないにしても、自宅通学の院生の場合、学費・研究費のかかりの部分をカバーできる額だ。残りはそれなりに苦勞して、各種アルバイトで喰いつなぐ。あいにく奨学金の選にもれ、しかも下宿だったりしたら、院生の負担は泣きたいぐらいの、最悪の状態になる。

*

ところで、育英会の奨学金には「返還免除」の制度があり、大学や研究機関の教員・研究員(免除職)というを一定期間勤めると、大学院時代の借金を返さなくてもよくなる。大学院生は大体そういう仕事に就くつもりでいるので、「貸与」と言っても「給付」(貰った)も同然、という感覚である。私だって自分が、毎年十二万一千円を返済するはめになるうとは思わなかった。でもオーバー・ドクター(OD)といつて、大学院を修了しても、なかなか就職先がみつからない場合が多い。東大の社会学に限って言うと、問題はまだまだ深刻でないので、博士課程をおえてから十年以上も公募に落ち続け、ついこの間までずっと無所属だった私など例外中の

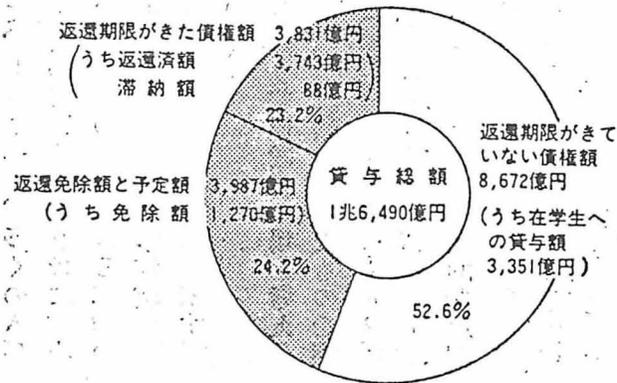
これで大学入試は全廃できる



日本育英会の専業資金の内訳 (平成元年度)

(1)

(ロ) 貸与金の状況 (63年度末現在)



学びたい人間が行く大学

大学入試が日本の教育を歪めている。高校生、中学生を受験に追い立て、小学生を塾に閉じこめていく。小手先で試験制度をいじくるたびに、事態はますます悪くなるばかり。特に共通一次このかた、偏差値が大手をふって歩きまわるようになり、大学の序列化が完成してしまった。

そのあおりで、大学は空洞化している。大学の四年間くらいゆっくり休ませてくれ。おおかたの学生は、大学に入るまでに、疲れ切っている。就職したらまた働きづめなわけだから、そういう選択もそれなりに合理性はあるが、社会全体としてみるなら、これほどの無駄もあるまい。日本中に星の数ほどある大学のうち、教育・研究機関としてまともに機能し

1989-30
2/7

例外だが、専門分野や大学によっては、就職できればそれこそ奇蹟、という話もよく聞く。だから、大学院を出たばかりで免除職のポストに就ければ、自分の幸運を天に感謝すべきだろう。

そこでこんな矛盾も起こる。Aさんは、幸い大学に就職できたので、毎月サラリーを貰えるうえに奨学金は返さなくていい。BさんはあえなくODの身の上となり、やむなくアルバイトのかたわら研究を続けているが、免除職についてはないから、乏しい財布のなかから奨学金も返さなくてはならない。弱り目にたたり目、泣きつ面に蜂とはこのことである。

Bさんみたいな人のために、特例もある。大学の「非常勤講師」(これは「免除職」でない)をしてつなぎながら、五年以内に常勤の職に就くと、すべりこみセーフで、Aさんと同じ免除の扱いになる。非常勤はそれこそスズメの涙ほどの給与で、ふつうならとてもやっていられないのだが、育英会の「前借金」のためやむなく、教壇に立つBさんが大勢いる。私大の経営を底辺で支える非常勤講師は、こうやって供給されている(部分もある)のだ。

*

研究(もの考える)には時間がかかる。時間は生産財の一種と考へてもいい。割りの悪い非常勤講師で、あたり貴重な時間を浪費したのではたまらない。——私は奨学金を返済す

ることにした。月一万円なにかしの出費が痛くないわけはないが、元はと言えば自分の使った金額である。しかも無利子の二十年賦なら、半分は貰ったと同じだ。そう思っ、気をとりにおした。それに、いざ返済を始めてみると、とても気がいい。使うときはあつけないが、返す段になると手応えがあるのが借金。これも人生の真実ではないか。借りっぱなしで返さない借金なんて、本人の為にもならないだろう。

アルバイトでその日暮しの私にも、奨学金が返せるものなら、就職してちゃんと月給を貰っている人たちは、なおのこと返済できる。いや、返済して当たり前だ。そうすればその分を元手に回して、奨学金をもっと増やせるだろう。返還免除なんていう制度はなしにすれば、人数も金額も倍ぐらいに拡充できるのではないか(ついでに利子もとれば、収入制限だって廃止できる☆)。そもそも、いい年をした大学院生が、親の収入の多寡で奨学金を受けられたり、受けられなかったりする現状がおかしいのだ。

☆現在、育英会の奨学金には、一種(無利子)、二種(有利子)の別があり、二種では収入制限が若干緩和されている。

そこで、育英会の奨学金制度をどう改革できるか、少し考へてみた。が、なにも話を育英会にかぎることはない、と気がついた。

奨学金の充実は、教育の機会均等を保障できるかどうかの

ているのは何割あるだろう。大学は遊園地、が当たり前になつてしまつたら、もうおしまいである。

*

大学の本来の姿を取り戻すには、教育の原点に立ちかえることだ。

大学はもともと、学生(でありうるすべての国民)の、勉強しようとする自己努力(自己教育)の機会を援助するための機関である。と言うか、少なくともそのはずだった。ところが、いまは入学試験がむずかしすぎて、あべこべに、多くの人がとからその機会を奪う結果にさえなっている。おまけに、小学校から高校までの普通教育の場を、上の学校に入る準備のためだけの場所にしてしまい、大量の勉強嫌い、学校嫌いを生み出している。学校は、差別と社会的不公平を作り出す、最大の温床みたいになつていく。

高校までは、誰でも同じことを習う普通教育の場と考えるべき。その段階で、資格試験、単位認定試験のようなものを課すのはよいとしても、むやみに(偏差値が幅をきかせるような)競争試験を課してはいけない。これからの社会が必要とするのは、個々人の多種多様な能力である。それを一元的な尺度で測れるような錯覚を与えるとしたら、有害このうえない。

大学に入つてからは、誰もが自分の適性に応じて、自分の得意な専門の勉強をする。そこでは当然、競争があつてい

1989-20
3/7

た。偏差値を目安に、受験生はまあこの辺だろうと、適当なランクの大学を狙う。新入生に聞いてみると、みんな驚くほど自分の入った大学のことを知らない。この大学のこの学科、この先生でなければ、なんていう志望の仕方はお目にかかれなくなつた。

昔は国立大学の月謝が極端に安くて、奨学金のかわりみたいな感じもあつた。師範学校もあつた。私立大学にはそれぞれ独自の校風があつた。いま国立大の月謝は、私大より少し安いか、という程度。私大は私大で、経常費の半分近くを、国庫の私学助成金でまかなつていく(昭和六十三年で、二千四百億円)。国に財布を握られた上、大学設置基準にもしぼられ、自由もやる気も失せている。私学とは名ばかり、半分国立大学みたいなものだ。もう少しコントロールを外して、大学ごとの自主性にまかせ、特色ある教育を競いあえるようにしたほうがいい。

大学が社会的に機能しているなら、企業としてペイするはずではないか。教育に投入する資源(経費)を、月謝などのかたちで回収できて当然である。——というのは、ひとつの考え方だが、検討に値しよう。採算がとれるというのは、それが独りよがりの事業でなく、人びとに支持されているということ、合理性があるということだ。

私立大学が、私学助成金なしでやっていけるなら、大学の設置基準も緩められる。弾力的にカリキュラムを工夫できる

い。

学びたい人間の自己努力を、制度の核とすべきだ。大学は、高校新卒の人たちだけのものではない。社会に出て活躍しながらも、もういちど専門の勉強の必要を感じたミッドキャリアの人たち。自分の人生を充実させるため、文化と学問の真実の姿を堪能したい人たち。外国から将来を展望されてやってくる人たち。みな大学に集えばいいではないか。月謝を払い、大学の機会費用を負担する人はみな、大学に在籍する資格がある。だから入学を認める。そういうことにすれば、入学試験はなしですませる。ただし、単位認定のほうはおぼつかない。そうやって、大学に入る時でなく在籍してから、専門教育の場で競争するわけだ。ある分野でだめだつて、別の分野もある。こういうやり方のほうが、はるかに人間的だ。

自分の将来を信じて、自分に投資する。——それが「自己奨学金」である。これを、大学改革の柱にしよう。問題を大学任せにしておいたら、いつまでたっても埒があかない。いまの教育をなんとかしたいなら、よほど思い切つた手を打たないとダメである。

*

日本の大学はどこも似たりよつたりで、特色がなくなつ

し、よし、教育のなかみで勝負だ、と私学本来のやる気も出てくる。文部省は規制緩和を渋りそうだが、教育も情報も供給過剰なこの時代、規制などないほうが質は高まるのだ。

親が子供の月謝を払うからいけない

さて、教育から利益をうるのは、何と言っても、教育を受けた本人たちである。それが本人の人生に、どれだけプラスになるかわからない。ついでに収入だつて、そのぶんよくなるだろう。もちろん本人以外の人びと、つまり社会にも利益が及ぶだろうが、それは間接的である。

教育費の負担が、親の肩に重くのしかかつていく。二人、三人と子供が大学に進んだ日には、たまつたものではない。住宅ローンや老親の世話、自分たち夫婦の老後の準備にだつて、金にかかるのだ。なけなしをはたいて学費を捻出することを考えると、あまりばつとしない大学に進んでもひきあわない、というところまでもう来ている。

親の経済力のあるなしで、子供の将来が左右されるなんて不合理だ。それを補ういみで、国費(税金)が使われている。国立大の月謝が安い(単純計算だが、国立大学の総予算を学生数で頭割してひとりあたりの経費に直してみると、その十分の一にもならない)のも、私大に多額の助成金を出しているのも、育英会の経費の大部分を国庫の借入金でまかなつていくのも、そ

ういう趣旨からだ。たしかに国費で、一部の高等研究・教育機関の経費をまかなうことは必要だろう。しかし、大学教育がこれだけ大衆化した今日、大学に行く費用を税金でまかなったりすれば、かえって不公平を拡大することにならないか。子供のいない親もいる。子供がいても、みな大学に進むとは限らない。一部の人がびとのための高等教育の巨額の経費を、国民がみな等しく負担する理由はない。

リッチな家庭の一人っ子だろうと、貧乏所帯の末っ子だろうと、同じ条件で、つまり、本人の希望や適性だけにもとづいて、大学に進むかどうか決定できるためには、本人がその費用を負担するという原則がいちばん手っ取り早い。親がかかりでなく自分の決断と責任で、他人様から学費・生活費を借り受ける。そして、教育の成果を社会に還元しながら、借金を返済していく。いまの日本の若者は総じて、子供ぼくて幼稚で困るが、この制度をとり入れるだけでもかなりシャキッとして、精神年齢が四、五歳はアップするのではないだろうか。

問題をすべて金銭づくで考えようとしている、と思わないでほしい。むしろこれは、大人たちからのメッセージである。お金のいみは、誰にでもよく分かる。人生にいよいよ船出しようという若者が、親がかりで苦勞もわからず、大学時代を遊んで暮らす現状はただけでない。それよりも、社会(を代表して、大学や銀行や民間の奨学金機関)に学資を立て替えてもらって、その期待と責任を噛みしめながら、自分で大学を

選択し、自分の将来と進路(そしてもちろん返済計画)を設計するのが本当だ。

どんな社会にもインエーション(成人のための通過儀礼)がある。われわれの社会で、それはさしずめ受験だが、それがわけもわからぬままの被作為体験と、まるまる親抱えの四年間の休暇ということなら、かえって有害ではないか。社会のモラルのエッセンスを、年若い青年につきつけ、その社会で真剣に生きる覚悟をうながすが、インエーションのはず。それなら奨学金を受けて(社会との契約を交わして)進学するほうが、どれほど明快なことだろう。

*

学生ひとりひとりの将来は、不確定で、茫漠としている。最初の志をまっとうできない場合もあるうし、若死してしまいう人もいるだろう。けれども彼らがまともなれば、その大部分が企業に就職して安定した収入を得ることは、ほぼ確実である。取りはぐれがない。彼らは日本の将来そのものだ。連帯して責任を負えば保険の意味合いも生まれ、回収の確実な貸付け先と言えるはずである。

親が大学の学費を払わずにすみ、大学受験も実質的になくなって、塾通いや家庭教師の経費など(これらは統計に現れにくい)もゼロになるとすると、中高年層の家計はかなり楽になる。最近、年功賃金体系の見直しが進んでいるが、その点でもプラスだ。また、どの世代も自分の教育・老後の出費だ

けを支払えばいいことになるから、世代間の不公平も防がれる。

大学独自に等級別の奨学金を

さて肝腎の奨学金だが、大学が窓口になって、学生の要求に応じて貸し付ける。公庫金融みたいなイメージである。

大学経費を月謝でまかなうには、月謝を現在の数倍に引き上げる必要があるだろう。それプラス生活費にあたる金額を、奨学金として学生に渡すようにする。いまの物価だとだいたい一人年額三〜四百万円くらいになるだろう。そして、いちばん大事なことだが、奨学金にも、利率や返済の条件など、多くの等級を用意して、まじめに努力してコツコツ単位を集めた学生や、専門科目で素晴らしい成績をおさめた学生は、活躍の度合に応じて、だんだん条件のよい奨学金に切りかわっていくようにする。

こうすれば、どの大学にも、必ずつぎのような学生がいることになるはずだ。

①きわめて優秀で、大卒初任給並みの給付(返さなくていい奨学金)を受ける学生(特待生)。——人数は少ないが、その大学のオピニオン・リーダーになるような学生になる。

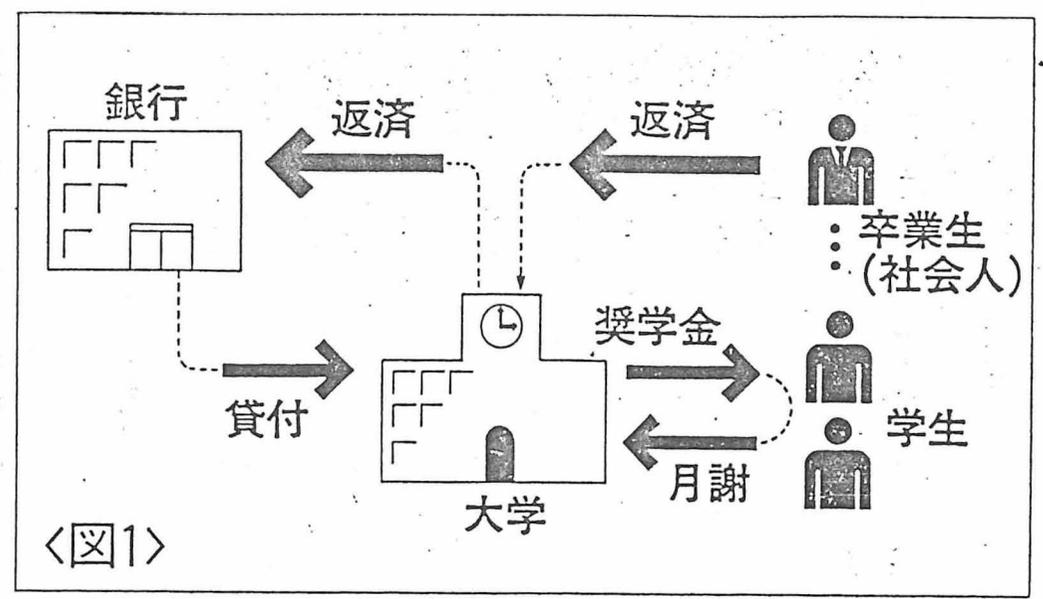
②それほどでないが、それなりの特典(無利子または低利の奨学金の貸与)を受ける学生(これにも、何段階がある)。——上級生になるほど、こういう学生の割合が増える。

③なんの特典もない(市中金利並みの)奨学金の貸与を受ける学生。——お金はあるが時間のない社会人や中高年の人びとも、この枠で学生として勉強できる。

*

大学は、奨学金を通じて、一種の再配分を行なうことになる。相対的に勉強しない(あるいは、結果のともなわぬ)学生が、より多くを負担して、相対的に勉強する学生を支えるわけだ。不公平なようだが、よく考えたらそうでない。③の学生は、ひとに認められるほど学業を身につけることができているわけではないわけである。もしかすると、適性がないのかもしれない。それでも自分の意思で大学にい(られ)るのだから、そのための費用(自分の受ける教育サービスの経費)をすべて自分が負担するのは当たり前である。立派な社会人として地位を築いたが、大学で学び直したい、という人だって多いはずだ。そういう人びとに門を閉ざしている現状より、このほうがはるかにいい。また、①の学生は人並み以上に学業に専念して、しかも将来社会にうんと貢献しそうなので、少々の奨学金など安いものである(本当は金額より名譽、つまりおだてることのほうが大切で、おだてるのに金はかからない)。

大学だけの奨学金では、偏りや不合理があるかもしれないから、大学と関係ない奨学金も、いろいろあったほうがいい。経済条件・宗教・特定分野・出身地別・外国人向け、等々。大学ごとの奨学金と、この種の奨学金の二本立てで、



<図1>

一芸に秀でるタイプの人も不利にならないようにする(いっぽう、研究者をめざす、大学院生のための奨学金は、趣旨が進うので、大学ごとでなく(全員支給型の)育英会方式でいいと思う。ただし、全員返済するのだが)。

もちろん奨学金の改革だけでなく、単位の認定を厳格にして、一

定の水準をクリアしないと卒業できないというメリハリをはっきりさせる。勉強してもしなくても結果が同じだ(卒業できる)と思うから、誰も苦勞して勉強しようと思わないのである。学業にはげむのは、当人にも社会にもよいことなのだから、目にみえるかたちで報いよう。大学は勉学の場所なのだ。そういう当たり前のことをはっきりさせる必要がある。大学にいたければ、ちゃんと勉強するが、あるいは、それなりの月謝を払うかどうか。ただし在籍しているだけでは、いつまで経っても卒業できない。入試に受かりさえすれば、あとは寝ていても卒業できる、なんていうことはもうない。

以上を要点を、金の動きを中心に、簡単にまとめてみよう(図1)。
 どうして入試がなくなるのか

さて、この奨学金制度がうまくいけば、入試はなくなる。入試をなくすには、まず入試の社会的機能を理解しないといけない。入試はなぜ存在する? ひと口で言うそれは、人材のスクリーニング(ふるいにかけること)のためだ。個人々人を見るかわりに、「〇〇大学なら安心」「××大学? 聞かないなあ」というように、大学にレッテルを貼ってしまう。有名大学とは入試のむずかしい大学のこと、その学生なら

一定の「品質」が保証される、と思うのである。——そこに手をつけないと、大学の序列化↓受験競争↓偏差値教育、という連鎖の根は絶てない。

こういう人材のスクリーニングをなくそうと思ったら、それよりもっときめ細かく客観的で信頼できる人材評価の方法を、作りだすことである。そのためには、奨学金の等級化も必要だ。

*

志望者のほうが入学定員より多いから、試験をしているわけである。それならいっそ、志願者を切り捨てるかわりに、入学定員のほうをふくらませる、つまり、みんな入学させてしまつたらどうだろう。そこまでやるぐらいでないと、改革なんかできない(定員がどうの、図書の数がどうのと、教育のなかに関係ないことばかりうるさい大学設置基準は、この際棚上げにする)。講義についていられない学生も入学してしまいかもしれないが、あとでキックアウト(半年か一年で除籍)にするか、ほとんど落第させる。卒業がむずかしいとわかれば、志願者もむやみに増えないはずだ。

それでも一部の大学に人気が集まる、ということも十分予想されよう。でも、心配することはない。もう一方で、定員割れのため、経営がなりたなくなる大学も必ず出てくる。そういう大学のキャンパスをまるごと買収して、定員を

ふやすのも一案だ。あるいは近所のビルを借りたついでいいじゃないか。

ところでいま世間に言う、「よい大学」とは、どんな大学のことだろう。就職実績があるのが、よい大学だ。必ずしも教育のなかと関係ない。実績があるから「優秀」な学生が集まり、それを企業も喜んで採用する。……という関係が、毎年繰り返されてきただけだ。

新しい奨学金制度が定着してくれば、この関係が崩れはじめ。どの大学だろうと、よい条件の奨学金を受けているが、んぼり屋の学生を、企業がほっておくはずがない。専門の学科で力を発揮できるのが判っているのだから、即戦力にもなる。しかも、紙きれ一枚の成績表とちがって、大学がいわば身銭を切っている奨学金は、水増しのしようがないから、この大学の判定も、いちおう信頼がおける。ということとは、伝統の「有名大学」を出ても、成績がばつとしなければ、もうあんまりいいことがない、ということだ(だから、一部の大学に集中する「混雑現象」も、あんまり心配しなくてよい)。

個人々人のきちんとした学力証明があれば、大学のレッテルは必要なくなる。ゆえに大学の序列化の意味がなくなつて、無駄な入試もなくなる。少なくとも、奨学金制度をきちん取り入れると、だんだんそういう方向に動きはじめる。

どの大学に行くかよりも、どういう奨学金を受けるかのほうが重要になれば、大学間格差は実質的に消滅したことになる

る。公立小学校には、特に格差なんてないが、大学も同じになると思えばよい。私学はむしろ、ユニークな校風で学生を魅きつけようとするから、本来の姿に戻ったと言えるのではないか。

大学の自由化も抱合せて

大学が同じ土俵のうえに立って、互いに教育サービスの内容で競いあう。これは学生にとっても、社会にとってもよいことだ。社会のニーズに応じて変貌していく柔軟性を、大学は持たなければならぬ。

どの大学にも行ける。となったとき、学生はどの大学に進めば自分にいちばんプラスかを、はじめて本気で考える。そこから、大学のほんとうの競争が始まるのだ。

学生が、あちらの大学、こちらの大学とかけもちで単位を取得できることも望ましい。そうやって適性を発見しながら、必要な単位を揃えていき、なるべく条件のよい奨学金のえられる大学を卒業する。

学生の移動の自由を阻んできたのは、いわゆる「学校間格差」と、入試の壁だった。しかしそのどちらも、もうなしにできる。大学間の単位の互換性を一〇〇%認め、大学と大学が、そしてA教授とB教授の講義が、教育の質を競いあうのが本来の姿ではないか。

学生に移動の自由を保証する以上に、教員にも移動の自由を保証しなければならぬ。

日本の大学の教員ほど、競争もなく呑気な仕事はめざらぬ。学生だけを責められないので、業績をあげてもあげなくても待遇が一緒なら、手を抜きたくなくなるのが人情だ。学生が教師を選べないのはいいことに、かろうじて成り立っているような講義も多い。

大学の教員は、教育と研究の両面を期待されている(評価の規準が二つある)ので、話がややこしいが、その辺を無視して話をすすめる——学生に人気のある、実力もある教員は、それなりに評価され、待遇もよくなる。あるいは、もっとよい条件で、他校に引き抜かれる。そんなことは、どんな業界でも当たり前のはずだが、なぜか大学は、そういうことから縁遠かった。いまは、私学助成金の手前、どんなにズバ抜けた教員がいても、彼(だけ)に高給を払うことはできないし、そういう人事慣行もない。しかし、そこにも手をつけるべきだろう。大学はつぶれることもある。それなら新規参入もありだ。要するに、大学の自由化である。

そんなことを言うのと、教員の「身分保証」をしない気か、という声もあがるだろう。しかし、それはおかしい。実力と実績あってこそその身分保証。捨てる神あれば拾う神あり、い

だ。そこにはまた、別な原理も必要である。

たとえば、少数民族の言語の研究。基礎的な科学研究のさまざまな分野。すぐ経済効果と結びつかないような、そして学生がワットとびつかないような分野も、いっぱいある。そういう分野の研究がしかし、人間の知識の発展のために、また、社会の豊かさのために、おろそかにできない。そういう研究にたずさわる人びとを継続的に養成し、研究の水準を維持するために、税金を使うのは正当だろう。国立の研究機関は、そういう研究者にポストを提供するためにある。

それはそうだが、国立「大学」の、「教育」機関としての側面を考えると、私立大学と区別して考えるべき理由はどこにもない。国立大学の学生が、私立大学の学生よりも恵まれた条件で(たとえば安い月謝で)卒業証書を手に行けるといえるのは、(国民の税金を使っていることを考えると)いかにも不合理である。国立大学も、国鉄がJRに生まれ変わったように、私

国立大学と私立大学は、どう分業するか

つでも再就職できるという開かれたチャンスが、本当の身分保証になる。学問も日進月歩の世の中に、非常勤講師やオーパー・ドクターの苦渋のうえにあぐらをかいて、のうのうと停年まで勤める権利なんて、誰にもないはずである。任期制でも降格制でもどんどん導入して、大学に活気を取り戻してもらいたい。

いまや巨大な知識産業に成長した日本の大学だが、内実はお寒い状態だ。二十一世紀にふさわしい大学に脱皮するため、これくらいの荒療治はどうしても必要である。

と言っても、高等教育のあり方を、なにからなまでに自由(市場原理)にまかせて解決できると言いたいのではない。特に、研究というものは、当面の採算にのらないのが普通なの

読みたい

本

届きます

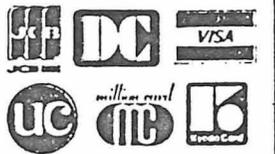
書名、出版社名、(著者・定価)をお知らせください

●お申し込み方法 お申し込みは電話・ハガキ・FAXでお受けします。

●料 金 何冊でも一回のお申し込みにつき300円です(送料別)。

●お支払い方法 本代・料金はお届け時にお支払いください。

※下記カードで利用いただけます。お申し込み時にご記入ください。
音効保証をのぞいてください。



ブックサービス(株)
☎(03)817-0711

〒113 東京都文京区本郷2-3-14
FAX (03) 818-5969

これで大学入試は全廃できる



立に移行することを考えてもよいのではなからか。

*

自己奨学金を考えたいのに、大学改革の青写真についても、ちょっとのべてみよう。

教育と研究。水と油とは言わないが、本来矛盾する要素をはらむ二つのものが、あいまいなかたちで混じりあっているところが、いまの大学は中途半端である。

明治・大正の昔なら、この二つはまあ一致していた。その頃ならいざしらず、いまどきの大学(国民の四割近くが進学する)で教えているからと言って、専門の研究の分野で優れている保証なんかどこにもない。理科系ではとくに、文化系でも遅ればせながら、研究の中心は大学院に移りつつある。

教育と研究を分離すること。教育は市場原理にのりやすいから、自由化する。研究(ならびに研究者養成)のほうは、税金など公的な資金で運営できるようにする。学部は私立大学に、大学院・研究所は国立のまま、というのが、いちばん明快ではないだろうか? もちろん、実際の組織は簡単に切りわけられないが、方針としてはこれではないかと思う。

大学も国際化しないと、摩擦の火種になる

日米構造協議が行なわれ、外国が直接日本の社会構造に注

文をつける時代になった。日本人の社会運営が自己流で、国際規格に合っていないからフェアでない、というのである。外国からみると、自分たちの参入を阻む、不公正な非関税障壁にみえる。

大学は本来、人種や文化を超えた人類共同体の共通知識を獲得・普及する機関のはずで、はじめから国際組織だったのだ。

ところが日本人は、そのことを忘れ、自分たちだけにわかるやり方で、都合のいいように運営してきたのではないか。教員がほとんど公募されない(または、公募と言っても有名無実である)こと。教員の自由な移動も少ないこと。そのためもあって、外国人の教員がほとんどいないこと。入試が難しく、日本人でないと合格しにくいいうえ、奨学金制度がきわめて不十分なこと。外から眺めるならば、これらはすべて、日本人の怠慢、国際性のなさ、閉鎖性と映る。

アメリカはこれまでずっと、世界中から大勢の学生・研究者を、自国の大学に受け入れてきた。日本が受けた恩恵も計りしれない。それにひきかえ、日本は、現在の国力にみあった、国際的責任を果たしうる大学の制度を、用意しているだろうか。

日本の社会に履歴をもたない外国人が自由に参入できるような大学であってはじめて、本当のいみで日本人にも開かれた大学になる、と思うのである。

「朝までビデオ——洋画ベストカタログ：作品・俳優・監督」

キーワード事典編集部編 洋泉社 1989年10月刊 pp. xxxiv-xxxv

橋爪大三郎 (社会学者)

■「ノスフェラトゥ」 吸血鬼映画の、古典中の古典。ヨーロッパ没落の焦燥、迫りくる危機の予感を完璧な様式美で描き切った。細長いシルエットを落とす、痩せこけたノスフェラトゥの徘徊。サイレントであることを忘れさせるおぞましい叫びに、全編が満ちている。

■「戦艦ポチョムキン」 その昔、過激派の政治集会の、目玉に上映されたのにつられて観に行った。そういう雰囲気だと、宣伝映画であるのかも忘れて、手に汗握ってしまう。有名な大階段のシーンもさることながら、同僚の銃殺を命じられた水兵たちが、叛乱に立ち上がるその瞬間のことが気になって忘れられない。

■「これがシネラマだ」 子供の頃、大阪の梅田に連れられて行って、冒頭のジェットコースターのシーンに、座席から放り出されそうになるほどの衝撃をうけた。あとはどんな内容か忘れてしまったが、あれは何だったんだろう。2作目の「シネラマホリデー」も、同工異曲。

■「炎 628」 松枝到さんがほめていたので劇場に足を運んだが、たしかにこれはすごい。親衛隊によるソ連農村絶滅作戦。斜に構えていられるゆとりなど吹っこんで、人間の底しれぬ業病に、恐

xxxiv

怖に近いものを覚えた。ひるがえって、日本人は中国での三光作戦をなぜ映画にできないのだろうと歯痒い思いがする。

■「ウェストサイド物語」 ロミオとジュリエットを翻案したミュージカル。バーンスタインの曲も、振付けも素敵で何回観たろうか。序曲が7分もあり、最初のマンハッタンの中撮りもなかなかいい。修学旅行から戻った日にも2回観てから帰ったが、あともう1回観ていたら横須賀線の鶴見事故に遭うところだった。

■「ビートルズがやってきた、ヤアヤアヤ」 2作目の「ヘルプ」は筋立てもあるが、これは同時進行のドキュメンタリーというか、映画そのものがイベントで、こんな映画がよく撮れたと思う。私は出遅れて、池袋文芸坐のビートルズ大会で観たが、満席の女の子がキーキー金切り声をあげ通して、なんにも聞こえやしない。ついでに財布も落としてしまった。

■「蜘蛛女のキス」 革命運動家と、ホモの男が監獄で同じ房に入れられて……という、例の話。男が記憶のなかからたぐりだすセピア色の映画が、また切なく哀しい。運命的な恋、そして実らぬ。誰もがなにかに凌辱され、出口のないところに監禁されているという、暗澹たる事実を信じたくなる。

■「気狂いピエロ」 ジャン=ポール=ベルモンドとアンナ=カーリーナの逃避行。意味ありげなショットの数々や、ランボーの詩。いま思えばでたらめな作りながら、大学に入りたての頃とて、いたく感動した。これから始まる時代を啓示する、みずみずしい神秘をたたえているようにみえた。

■「紅高粱(紅いコーリャン)」 “元気の出る”映画。野放図なふてぶてしさの魅力に溢れている。音楽(妹妹你大胆地往前走、酒神曲)がまたいい。エスノ・ロックの傑作。粗削りだが、中国の若い世代のほとぼしるエネルギーに圧倒される。